

おかあさんの生まれた家

前川 康 男

絵 織 茂 恭 子



おかあさんの生まれた家

前川 康男

絵 織茂恭子



913

前川康男

おかあさんの生まれた家

講談社 1979

173p 22cm (児童文学創作シリーズ)

まえかわ やすお

おかあさんの^う生まれた^{いえ}家

昭和54年10月16日 第1刷発行

定価880円

著者 前川康男

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 廣濟堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

© 前川康男 1979 Printed in Japan

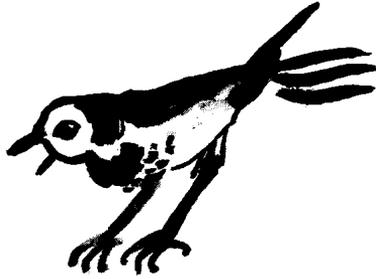
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8093-189321-2253 (0)

(見一)

おかあさんの生まれた家





——もくじ——

1 飛とびつちよが三さん年ねん生せいのとき……………4

2 おかあさんの生うまれた家いえ……………32

3 のつぽ少しやう年ねん……………57



7	6	5	4
ある夜 <small>よ</small> のできごと	山 <small>やま</small> の <small>ちい</small> さな町 <small>まち</small>	一 <small>いち</small> まいの写 <small>しゃ</small> 真 <small>しん</small>	まつ白 <small>しろ</small> い小鳥 <small>こどり</small>
.....
148	120	96	81

第一章 だいいしやう

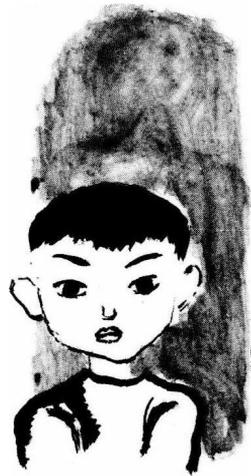
飛びっちょが三年生ねんせいのとき

1

飛びっちょという子の話をします。

飛びっちょというのは、もちろん、その子のあだ名なです。ほんとうの名なまえは、としゆき（利行）といました。

どうして、そんなあだ名ながついたかといいますと、としゆきがクラスでいちばんちびっちょだったからです。ちびっちょで、すばしこくて、ぴよんぴよんよくはねまわり、野球やきゅうやサッカーがじょうずだったからでした。走るはしるのもはやいし、てつぼうのけあがりもらくにやりましたし、うさぎとびきょうそうなら、



だれにも負けません。それに、ちびのくせに、すもうも強かったのです。

さて、その飛びっちょが三年生のとき、夏休みがおわって二学期がはじまつたころ、飛びっちょをおどろかせるようなできごとがありました。どんなできごとか、それをお話しようと思うのですが、いくらぼくでも、飛びっちょのことをなにからなまでに知っているわけではありません。飛びっちょがぼくに話してくれたこと、ほかの人から聞いたこと、いろいろなことをつなぎあわせて、お話するわけです。

ぼくの話聞いて、

「なあんだ。じけんでもなんでもないじゃないか。そんなことは、できごとのうちにはいらないよ。」

そういう人がいるかもしれませんが、でも、飛びっちょにとっては、大きなできごとでした。なぜかといいますと、それまで一日じゅう友だちとわいわいあ

そんでいたのに、飛びっちょはびたつとあそばなくなり、勉強もぜんぜんしなくなつてしまつたのです。

勉強ができるほうだつた飛びっちょが、

「としゆき、ぼんやりするなっ！」

と、先生にどなりつけられたり、黒板のまえに立たされたり、教員室によべれたりするようになりました。

「おい、飛びっちょ、どうしたんだい？」

「なにかこまつたことがあるのか。あるんだつたら、そうだんにのつてやるぜ。元気だせよ。なあ、飛びっちょ。」

なかのいい友だが、そう聞いたくらいです。

そうです、そのできごとを話すまえに、ちよつと、飛びっちょの家のこと、それからおとうさんとおかあさんのことを、お話ししておかなければなりません。



飛びつちよの家は、東京にありました。東京のにぎやかな町の表通り、菊屋というお店で、ハンドバッグだけ売っているせんもん店でした。小さいけど、なかなかお客のおおい、わりに有名な店です。というのは、品ものがいいことと、菊屋の主人がじぶんでデザインした、この店にしかないハンドバッグを売っていたからでした。

菊屋のご主人は、せのすらっとした、七十さいくらいのおじいさんです。あたまのかみをいつもきれいにとかして、着ているものもきちんとしていました。すてきなセーター・シャツ・ズボン、くつもぴかぴかでした。

すしがんですが、いいたいことをぼんぼんという、気もちのからつとした人です。

「ここは、東京のまんまん中さ。ここいらへんで売っているのは、東京一の品

もんだ。銀座にだって、負けるもんかい。」

「しかし、このごろ、町がよごれたね、ほこりっぽいこと、ガンガン、ガチャガチャうるさいこと。きれいな町にしたいよ、すっきりした、おちついた町にね。ごみなんかほっぽりなげたら、しょうちしねえから。」

おじいさんは、よくそういつていました。この人は七十いくつですから、飛びっちょのおとうさんではありません。飛びっちょのおじいさんなのです。

さて、つぎに、飛びっちょのおとうさんとおかあさんのことをお話します。いま、菊屋のご主人は飛びっちょのおじいさんですといいましたが、飛びっちょには、おとうさんもおかあさんもいなかったのです。ふたりとも、飛びっちょが赤んぼうのころになくなってしまったのです。

おじいさんは、まごの飛びっちょに、こんなふうに話していました。

「としぼうのおとうさんはな、としぼうがおかあさんのおなかの中なかにいるうちになくなってしまったんだ。冬ふゆのはじめだったよ。川かわに落ちた子どもを助けようと、おとうさんは、川かわへとびこんでね。泳およぎはたっしやだったから、子どもは助けあげた。たしか五つの子こどもだった。子どもは助たすかった。ところが、じぶんは急性肺炎きゅうせいはいえんという病び気ょうきになって、あつというまになくなってしまったのさ。入院にゅういんして二日ふつかめにね。おとうさんは一週しゅうかん間かんくらいまえからかぜをひいていたんだ。それが、いけなかった……。」

おじいさんは、飛とびつちよのおとうさんが三十ちよつとで、じぶんより早くなくなってしまうことがくやくしてくやくしてたまらなかつたのでしよう、その話はなしをなんどもくりかえし飛とびつちよに話はなしていました。

「それから、おかあさんはな、おとうさんがなくなつて、としぼうが生うまれて、六むか月げつくらいになつたとき、やはり病び気ょうきになつて、なくなつてしまつたん

だよ。」

両親りやうしんがいないので、飛びっちょは、おじいさんとおばあさんにそだてられました。ふたりは、飛びっちょをとともかわいいがって、

「あれがほしいんだけど。」

と、飛びっちょがいうと、よっぽど高いものでないかぎり、本ほんでもぶんぼうぐでもおもちゃでも買かってくれました。そして、めったなことでは、しかったり、おこったりしませんでした。

おばあさんも毎日まいにち、飛びっちょのためにいっしょうけんめいおいしいものをつくってくれました。

「としゆきはね、わたしのつくる料理りやうりは、なんでもおいしいおいしいって食たべてくれるんですよ。」

おばあさんは、ほおがほんのり赤あかく、ふっくらふとった、かわいいかんだの

人ひとでした。

あ、そうです。いいわすれるところでした。飛とびっちは、おとうさんおかあさんがいないだけでなく、きょうだいもいなかったのです。ひとりっ子こでした。でも、飛とびっちははけっしてよわわしい子こどもではありません。両親りやうしんがいないからといって、めそめそしたり、ぐじゅぐじゅすねたりするようなことのない子こどもでした。

2

まえおきが長ながくなりましたが、では、夏なつ休みやすみがおわってまもなくのできごとというのを話はなしすることにします。

九月がつはじめの、ある日ひの午後ごごのことです。

飛びっちょが学校からかえってくると、おばあさんが店のそうじをしていて、店のおくにこげ茶色のくつがそろえてありました。

(ぞうさんのくつだ！)

見なれているくつなので、すぐわかりました。

(ぞうさんは、きつとおじいちゃんとしょうぎをやっているにちがいない。よし、そうつと行って、おどかしてやれ。)

飛びっちょは、足音をしのばせて家の中へ。

ぞうさんというのは、菊屋からあるいて三十分くらいのところにあるペンキ屋のご主人で、清三という名まえです。この人は、飛びっちょのおとうさんの友だちでした。

かたはばがひろくて、がっしりした大男、日にやけてまっ黒なかおをしているので、飛びっちょはこの人のことをぞうさんといっていました。耳たぶの大

きいところもにっていますし、にこにこしていて、名まえも清ぞうだから、ぴつたりのあだ名でした。

(やってる、やってる。)

思ったとおり、ふたりはパチツパチツとしようぎをやっていました。茶の間
のてまえで、中のようすをうかがうと、おじいさんの声が聞こえてきたので
す。

「おっほん、なあ、清三さん、池野医院のみなさんは、お元気でしうかね？
ずいぶんお会いしてないが。」

すると、清三さんがいいました。

「ああ、たつ子さんのうちですか、それが、わたしもずっとごぶさたで、もう
二年いじょううかがっていないんですよ。」

「池野さんのおくさんが……。」